

野尻町文化財調査報告書第3集

KAMI YA JYO SHI  
紙屋城址遺跡

漆野原県営ほ場整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査概要報告書



1988. 3

宮崎県西諸県郡  
野尻町教育委員会

野尻町文化財調査報告書第3集

KAMI YA JYO SHI  
紙屋城址遺跡

漆野原県営ほ場整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

1988. 3

宮崎県西諸県郡  
野尻町教育委員会



紙屋城址全景

## 序

漆野原ほ場整備事業にともない、遺跡発掘調査を、野尻町教育委員会は、三年間実施してきました。

本年度は、最終年度として、9月から12月にかけて、中世の山城址のある城原地区での発掘調査となりました。

昭和60、61年度が、旧石器・縄文時代等の遺跡調査であったのに比べて、本年度は、一部分で弥生時代にも至りましたが、主として中世の山城に関連する調査という特徴をもったものであったといえます。

紙屋城は、伊東48城のひとつであり、東・西・南方は深谷の絶壁の要害に囲まれ、北方に数多くの空堀を配置した、県内でも代表的な山城がありました。

この周辺調査で、鮮明に現存する第2の堀、土塁の保存と調査、第3の堀(菜研堀)の解明、第4の堀の発見や遺物収取の成果をあげることができました。さらに、弥生後期の花弁状住居址・中世の建物跡や多数の遺構・遺物が発見できましたことも成果がありました。

3年間の最終年度として、無事に遺跡発掘調査が終了しましたことは、県文化課の適切な御指導・御援助と、多雨年の困難な中で、発掘作業に従事していただきました皆様の、御協力の賜と感謝申し上げます。

それとともに、漆野原土地改良区や大淀川下流土地改良事務所の皆様、調査地区の地主や生産者、ほ場整備工事業者の皆様等の御理解、御協力にも厚くお礼を申し上げます。

今後は、3年間の遺跡発掘調査の成果を、報告書にまとめるとともに、永久保存が可能になりました第2の空堀をはじめ、ふるさとの文化財を保護していく所存であります。

この調査に御協力いただきました全員の皆様、ありがとうございました。

昭和63年3月

野尻町教育委員会

教育長 今吉忠義

## 例　　言

1. 本書は漆野原県営圃場整備事業（昭和62年度分）に伴い野尻町教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は昭和62年9月9日から12月25日に至る間実施している。
3. 調査関係者は次のとおりである。

調査主体 野尻町教育委員会

教育長 今吉忠義  
社会教育課長 吉田哲幸  
同 課長補佐 前田昌重  
同文化財担当 脇村一也

調査担当 近藤 協（宮崎県教育庁文化課主任主事）

4. 本遺跡調査においては、土壤分析を有村玄洋氏（県総合農業試験場）に依頼し、御所見をいただいた。また、陶磁器については、大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）に御教示いただいた。
5. 本書の執筆は、第Ⅰ章1を、脇村がおこない、その他は近藤が執筆した。
6. 本書の編集は近藤がおこなった。
7. 本報告の方位は磁北であり、レベルは海拔絶対高である。

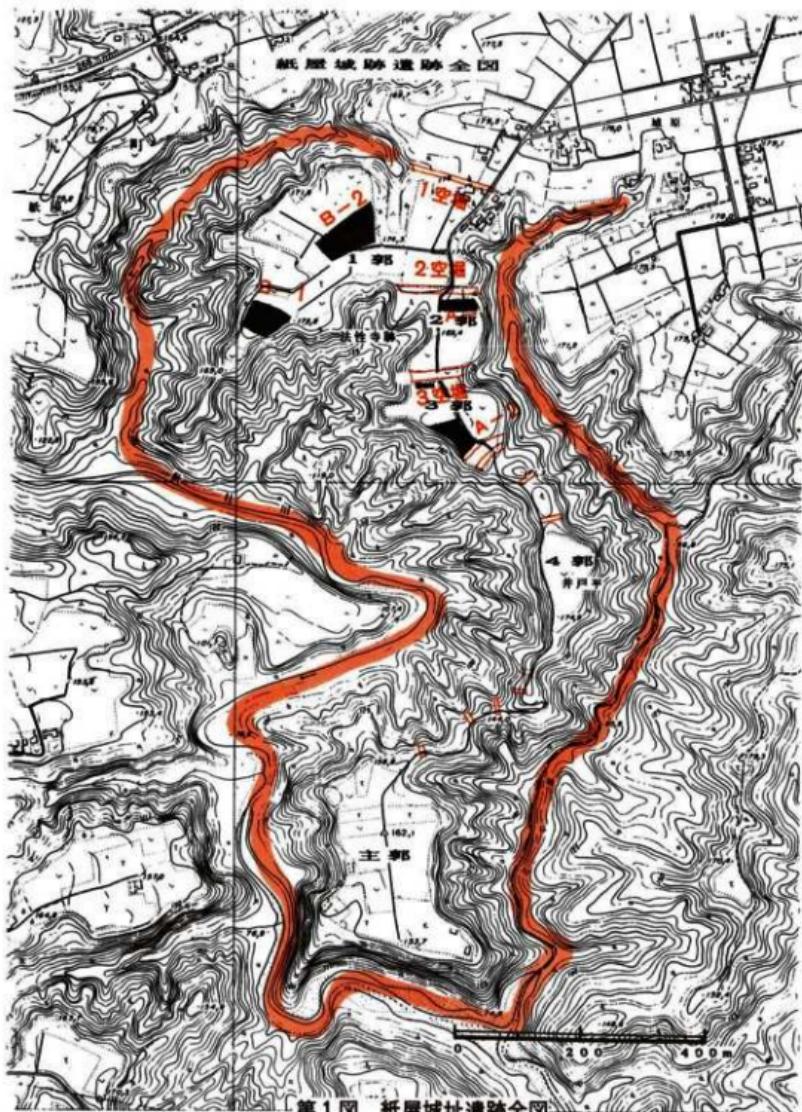
## 本文目次

第1章 はじめに.....	2
1. 調査に至る経緯.....	2
2. 遺跡の位置と周辺の歴史的環境の概要.....	2
第2章 調査の概要.....	3
1. 調査の概要.....	3
2. 層序.....	6
3. A - 1 区の概要.....	7
①遺構.....	7
②遺物.....	9
4. B - 1 区の概要.....	10
①6号掘立柱建物.....	11
5. B - 2 区の概要.....	14
①1号竪穴住居址.....	14
②6号掘立柱建物.....	18
第3章 紙屋城の歴史概略.....	19
第4章 まとめ.....	19
付. 紙屋城址遺跡における土壤調査.....	22

## 挿図目次

第1図 紙屋城址遺跡全図.....	1
第2図 野尻町主要遺跡位置図.....	3.4
第3図 紙屋城址遺跡基本土層図 (A - 2 区) .....	7
第4図 A - 1 区 pit 1・17断面図.....	7
第5図 紙屋城址遺跡A - 1 区出土遺物実測図.....	8
第6図 紙屋城址遺跡B - 1 発掘区遺構配置図.....	10
第7図 6号掘立柱建物実測図 (B - 1 区) .....	11
第8図 紙屋城址第2空堀・土壙断面図.....	12

第9図	紙屋城址遺跡・B-2発掘区遺構配置図	15
第10図	紙屋城址遺跡・B-2区1号竪穴住居址実測図	16
第11図	1号竪穴住居址出土遺物	17
第12図	6号掘立柱建物実測図	18



第1図 紙屋城址遺跡全図

# 第1章 はじめに

## 1. 調査に至る経緯

宮崎県西諸県郡野尻町において、昭和56年度から漆野原地区の県営圃場整備が行なわれている。それにより、昭和60年度に新村遺跡・高山遺跡、昭和61年度は漆野原第1遺跡、漆野原第2遺跡、漆野原第3遺跡の発掘調査を行い、記録保存の措置をとった。圃場整備事業最終年の昭和62年度も事業区内の埋蔵文化財の調査として分布、試掘調査が県文化課によって行なわれた。

事業区内に紙屋城址の土壘、空堀があることは確認されていたが、調査により、その他にも数ヶ所の遺跡の存在が判明したため、大淀川下流土地改良事務所・漆野原土地改良区・県文化課・町教育委員会の4者で埋蔵文化財の保護について協議が行なわれ、通称第2の空堀は保存することになり、また事業施工上、現状保存が困難な部分もあり、その記録保存の措置をとることになった。これらの遺跡については城址に因む紙屋城遺跡の遺跡名が付され、調査は野尻町教育委員会が主体となり、県文化課近藤 協主事の担当で昭和62年9月9日から昭和62年12月25日まで発掘調査が行なわれた。

## 2. 遺跡の位置と周辺の歴史的環境の概要

野尻町は県南西部の高標高地にあり、霧島山の東に展開する諸県盆地の一部を形成する。町域は南北に短かく(4~7km)、東西に長い(19km)。地勢は北に山地が連なり、平坦面は小河川に開析された台地状地形や盆地からなっているが、一般に複雑に入りこんだ丘陵地形が発達している。この近辺は、いわゆる『シラス』といわれる灰白色火山灰が厚く堆積していることで知られるが、その他にも霧島山系の火山灰が複雑に重なりあっており。

古代日向十六駅のひとつである「野後」駅に比定されているこの地は、旧石器時代から近世に至るながい時間に育まれた幾多の遺跡、史跡を内包している。紙屋城址遺跡に関連する時代の遺跡をあげれば、土墳墓・竪穴住居址を検出した弥生時代

後期の遺跡である大荻遺跡がある。本遺跡検出の竪穴住居址は、大荻遺跡の間仕切りを有する住居址と同類のもので、町内では今回の発掘で2例目となる。城址は紙屋城址のほか、野尻城址、漆野今城址、戸崎城址、高松城址、岩牟礼城址が知られているが、中世の典型的山城址として応時をしのばせるのは、このうち紙屋城址、野尻城址、戸崎城址がある。

以上他の時代の遺跡詳細については本報告にゆずりたい。

## 第2章 調査の概要

### 1. 調査の概要

昭和62年度県営圃場整備事業漆野原地区にともなう埋蔵文化財発掘調査としておこなった紙屋城址遺跡発掘調査は、紙屋城域内に所在する圃場整備対象耕地（第1・2・3郭）について実施した。調査地は第1郭の2箇所（B-1・B-2区）、第2空堀および土塁、第2郭の1箇所（A-1区）、第3空堀、第3郭の2箇所〔A-1区・第4空堀（仮称）〕である。

紙屋城址遺跡は西諸県郡野尻町大字紙屋にある中世山城である。城跡は5つの郭を北から南に「S」字状に連続させて城域を形造る典型的な連郭式山城で、第1空堀から主郭まで約1,370mある。各々の郭は東西南面は険峻な急崖によって隔てられその急落する谷部には、東側、南側に秋社川、西側は城谷川が流れている。尾根部あるいは平坦部を断ち切って各郭部を区切っている空堀は、北端の第1空堀から、主郭直前の12空堀まで、12条を数える。第1空堀から第3空堀までは、平坦面を人工的に堀り切って構築されたもので、主郭側すなわち南側に土塁が構築されていたものと考えられるが、現在明瞭に残っているものは、第2空堀に付随する第2土塁のみとなっている。第5空堀から第12空堀は自然地形を巧みに利用したもので、急落する狭隘な谷部で断絶している。

第1郭……第1空堀と第2空堀間にあって、約61,300m<sup>2</sup>の面積を有し、各郭部のなかでもっとも広い。B-1区・B-2区の2つ発掘区がある。

# 野尻町全図



第2図 野尻町主要遺跡位置図

第2郭……第2空堀と第3空堀間にあって、11,100m<sup>2</sup>ある。郭内西側には舌状の平坦面があって、法性寺跡といわれている。調査としては、第2空堀、第2土塁の農道となって断ち切られる部分について、断面の調査を行なっている他、A-1区発掘区を設定している。

第3郭……第3空堀と第4空堀間にあって12,500m<sup>2</sup>ある。南端にA-2区発掘区を設け、第3空堀についても調査を実施している。

第4郭……第7空堀と第8空堀間にあって、7,500m<sup>2</sup>ある。通称、“井戸平”（ツリンデラ）といわれ、城跡に関連する井戸跡が残る。調査対象外区である。

第5郭（主郭）……主郭であり、41,250m<sup>2</sup>ある。5つの郭部のうち、もっとも標高が低く、平均標高160mほどである。調査対象外区である。

## 2. 層序（第3図）

紙屋城址遺跡の全発掘区の層序は、少なくとも考古学的な対象となる土層面までは、基本的には同一とみてさしつかえないものである。ここでは代表的な一例としてB-2区の土層断面図を掲載する。

I層……赤ホヤ火山灰層である。降下火山灰層とおもわれ、最下層に比較的大粒のオレンヂバミス粒を含んでいる。橙色をしている。

II層……漆黒粘質土。堅くしまる黒色帶。断面はテカテカ光る。III層との層界は不明瞭でボーツとしている。

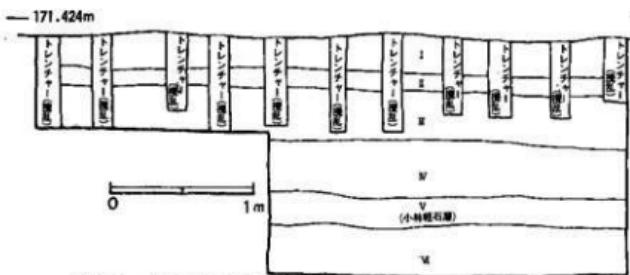
III層……黒褐色土。極めて堅くしまっている。乾燥すると不規則にヒビ割れる。白色小粒を多く含む。

IV層……暗褐色土。粘性のある堅くしまった層である。小粒のオレンヂバミスを時に含む。

V層……灰褐色土。小林軽石層である。拇指大のオレンヂ色のバミスを多く含む。堅くしまっている。上下層との層界は極めて明瞭である。

VI層……褐色粘質土。粒子の細かい粘土である。他層に比較してやわらかい。灰色の卵大ブロックを時に含み、赤橙色微粒を見る。

なおI層はB.P 6000年～B.P 6,300年前、V層はおよそB.P 11,000年前に降下したとされる火山灰層である。



第3図 紙屋城址遺跡基本土層図 (A-2区) (1/40)

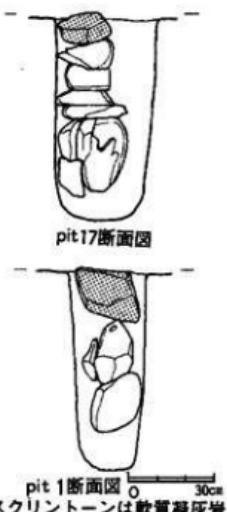
### 3. A-1区

第2空堀と第3空堀にかこまれる部分、すなわち第2郭と考えられる範囲のうち比較的原地形の残存している部分、第2空堀付随の土塁から南へ20mに位置する1,206m<sup>2</sup>を調査対象とした。調査区は東西に長く、第2空堀（第2土塁）に平行しており、西にゆるく傾斜している。赤ホヤ上層で剥いだ面は、東西方向に全発掘にわたってトレンチャーが通っており柱穴等の遺構を少なからず損傷している。検出された遺構は、不定形の土壙、多数の柱穴である。柱穴のなかには、礫を充填するものが数個ある。柱穴中より出土した陶片、土師器片により、紙屋城址に関連した遺構であると考えられるが、掘立柱建物、その他の明確な施設をつかめていない。

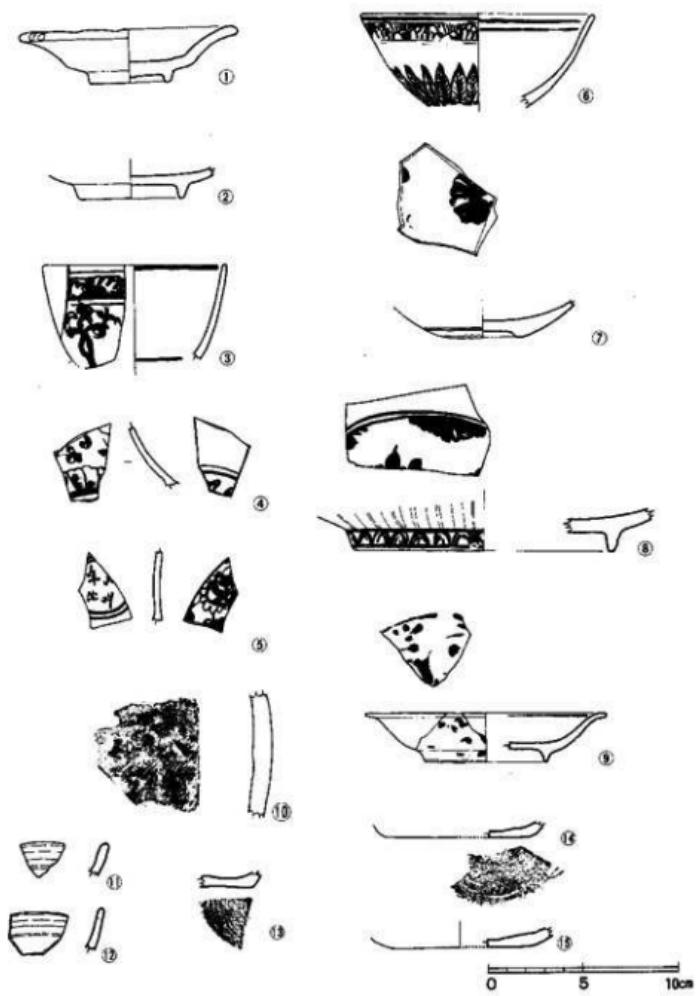
A-1区から第2土塁間は、土取りのため深く削平されしており（約1m）調査対象としていない。

#### ① 遺構（第4図）

pit 1は直径28cm、深さ71cmを測るもの。中に砂岩（硬質）円礫が2点、うち上位にあるものは小さな窪みがある。いずれも焼礫で赤褐色を呈する。最上部は軟質凝灰岩（通称灰石）がのる。検出面は赤ホヤ火山灰層で、カシワバン層まで掘られており。埋土は細粒の赤ホヤブロックの混るサラサラした暗褐色土である。礫は意図



第4図 A-1区 pit 1, 17断面図 (1/20)  
 (スクリントーンは軟質凝灰岩  
 ・他は焼けた砂岩)



第5図 紙屋城址遺跡A-1区出土遺物実測図 (1/3)

的に投入、あるいは組み込まれたものとおもわれる。

pit17は長径37cm、深さ73cmを測る。pit中に人為的につまれたとおもわれる礫が詰っている。底には18cm×26cm大の楕円礫が立てられて、合計8点くらいの破碎礫がつまれる。すべて熱を受けて赤化している。最上位は軟質凝灰岩である。

## ② 遺物

### 青磁（第5図1）

口径10.5cmと小形の青磁棱花皿。完形ではないが、口縁から底部まで遺存する。焼きが不良で、不透明な灰緑色の釉色を呈する。見込は露胎で黒褐色をしている。15世紀後半から16世紀中葉にかけてのもの。

### 白磁（第5図2）

白磁皿の底部である。高台脇まで施釉あり、高台内は露胎となる。

### 染付（第5図3・4・5・6・7・8・9）

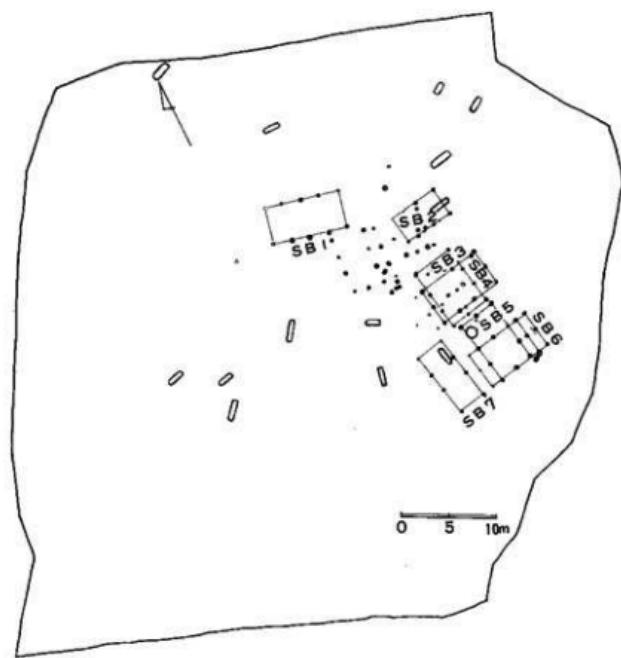
3.は景德鎮窯系の染付碗。推定口径9.0cmを測る。15世紀末から16世紀中葉。5.は同じく景德鎮窯系碗の高台内部で“大明年造”銘がみえる。16世紀。6.はこれも景德鎮窯系、染付蓮子（レンツー）形碗である。外面縁部に波涛文、腰部に蕉葉文がめぐる。15世紀末から16世紀中葉。7.は染付葵筋底皿。見込に花文、外面腰部に蕉葉文あり。疊付部は露胎となるが、内は施釉している。15世紀後半から16世紀中葉。景德鎮窯系である。8.はピット中より出土した染付皿。内外側面に蓮弁文を陽刻している。16世紀前半から中葉。景德鎮窯系である。9.は小形の染付皿、これもピットから出土したもの。見込に玉取獅子文、外面は唐草文であり、内側は釉がやや不透明。高台内は施釉され、露胎は疊付部のみとなる。15世紀末から16世紀中葉とおもわれる景德鎮窯系。

### 瓦質土器（第5図10.）

印花文を施した火鉢かとおもわれる。内外面、黒灰色。内面は粗いナデ仕上げである。

### 土師皿（第5図11・12・13・14・15）

11.12.13.14.15は土師皿である。いずれもpit中から出土した。13は糸切底。14.はヘラ切り底を呈す。



第6図 紙屋城址遺跡・B-1発掘区遺構配置図 (1/600)

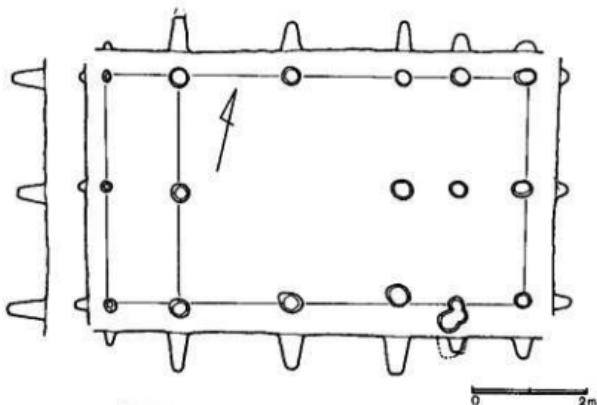
#### 4. B-1区の概要

第1空堀と第2空堀間に囲まれた第1郭にあり、1郭の南西端隅にあたる。

調査区の北西部、南東部はすぐに急落して急崖を形成する。B-2区に近接しており、北東約150mにB-2区をみる。B-1調査区は本年度調査した区画のなかで唯一、トレンチャによる搅乱のない調査区である。

赤ホヤ火山灰上層で表土を剥いだ段階で地形をみると、南から北へ緩かに傾斜している。

検出された遺構は、掘立柱建物7棟（中世）、柱穴群、土壙である。掘立柱建物



第7図 6号掘立柱建物実測図 (B-1区) 1/100

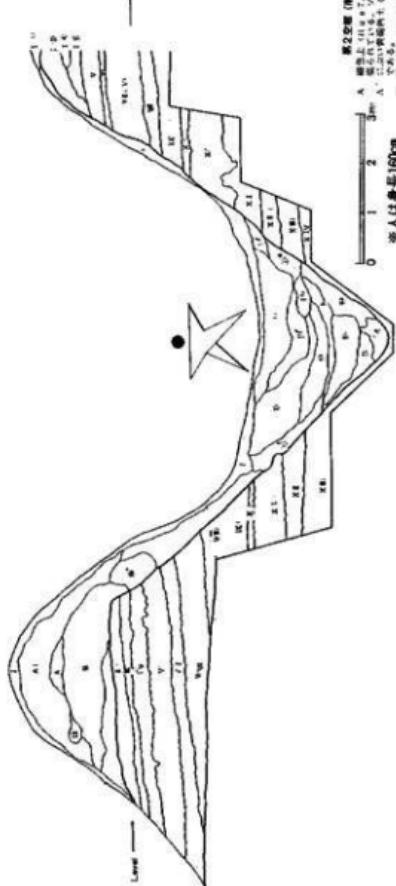
は発掘区中央から東側に集中して検出されているが、主軸方向から2群に分けられる。南北方向に主軸をもつもの（SB3.SB5.SB7）、東西方向に主軸をもつもの（SB1.SB2.SB4.SB6）、である。柱穴の検出数からして掘立柱建物が効率的に建ち、建てかえはみられるものの比較的短期間の居住域だったとおもわれる。

#### ① 6号掘立柱建物 (B-1区) (第7図)

発掘区の南東端に位置しており、5号掘立柱建物と切り合っている。4柱穴を5号掘立柱建物と共に共有する。2間×2間の長方形プランを呈し、東西両翼に扉を付設する。梁行200cm、桁行は200cm、300cmを測る。桁行方向はN-15°-Eで、5号掘立柱建物とは直角に切り合う関係にある。総面積は20.32m<sup>2</sup>、扉部を入れると29.78m<sup>2</sup>である。

#### 5. B-2区の概要

B-2区として設定した発掘区は紙屋城址遺跡中の第1空堀と第2空堀間、すなわち第1郭としてとらえられる範囲のうち、中央からやや西寄りの約5,570m<sup>2</sup>、標高約171mの範囲で、B-1区に隣接している。



卷二十九

「おお、これでいいやつだ!」と喜んで、手に取る。中身は、白い粉の袋で、袋の上には「TOY R. U.」と書かれていた。袋を開けると、中には、白い粉の砂糖みたいな物が入っていた。

（[H] = 7.5V R/4/2） 中くらいの粒度の褐色土で、やや粘性。

（註）「新編」の「新」は、元の書名を改めたもので、本題の「新編」とは別である。

金剛が口に含む。ややしきりの職工である。

（ア） $\frac{3}{4}$  によくしました土で、小林（1.0m K）も受けた。

（アーヴィング）——（じゅうにがたく）しまり、音子が結構いい。新規に先駆がある。

小学校の先生である。仄見リープ色をしていいが、集中力に優れた人物、明暗色大材をもつ。

江蘇省常熟市人民檢察院檢察官列席審議會制度

（1）「おはようございます」と「おはよう」の区別：「おはよう」と「おはようございます」は、どちらも朝の挨拶ですが、「おはようございます」はより丁寧な表現で、相手を尊重する意図があります。

細胞壁 (H<sub>2</sub>O + 30% R<sub>4</sub>) 4) 細胞のつまみ、中核上、断面は灰青色をもつ。

332) 電離子 + ( $H_2 = 10^4 R \pi^2/2$ ) 過程上に、1.0mKの水素(純度)が最も

レジスクリ一人き。  
アスコニ (自  $\pi$  ISO R 4/2) ③にて、ナビを電子音で、色調がやや弱

（H = 0.30 M ± 0.1）やや減少した回帰係数が、

筆者著「2021 R.4.4」解説文のやや前略、十分との等差が問題である。

（2）灰質轉化質土 (Hg & 30Y R 4/2) 粘性の7%より弱い粘土で、他の各下

第8図 紙層城址第2空堀・土壁断面図 (1/160)

調査にあたっては、土層確認のためのトレンチを数ヶ所に設定した後、重機によって赤ホヤ火山層直上で全面にわたって剥いでいる。赤ホヤ火山灰層直上を全面精査の結果、弥生時代後期初頭の堅穴住居址2軒、中世の掘立柱建物跡7棟が検出された。発掘区は農道道路敷の部分幅約5m、長さ60mの範囲を徐々全てが北西～南東方向のトレンチャーによって擾乱されているが、遺構の分布が比較的疎であることもあって、トレンチャーによる遺構破壊は、遺構全体の把握にとって最少限にとどめられている。

弥生時代の堅穴住居址は、発掘区北部に2軒隣接して確認している。2軒とも弥生時代後期初頭から古墳時代後期にかけて日向を中心特徴的に出現する花弁状の特異な突出部を巡らすいわゆる花弁状住居址で、一軒(SA 1)は円形住居を基調として花びら状の突出を巡らすもの、二軒(SA 2)は正方形住居を基調として長軸上2ヶ所に突出部を設けるものである。

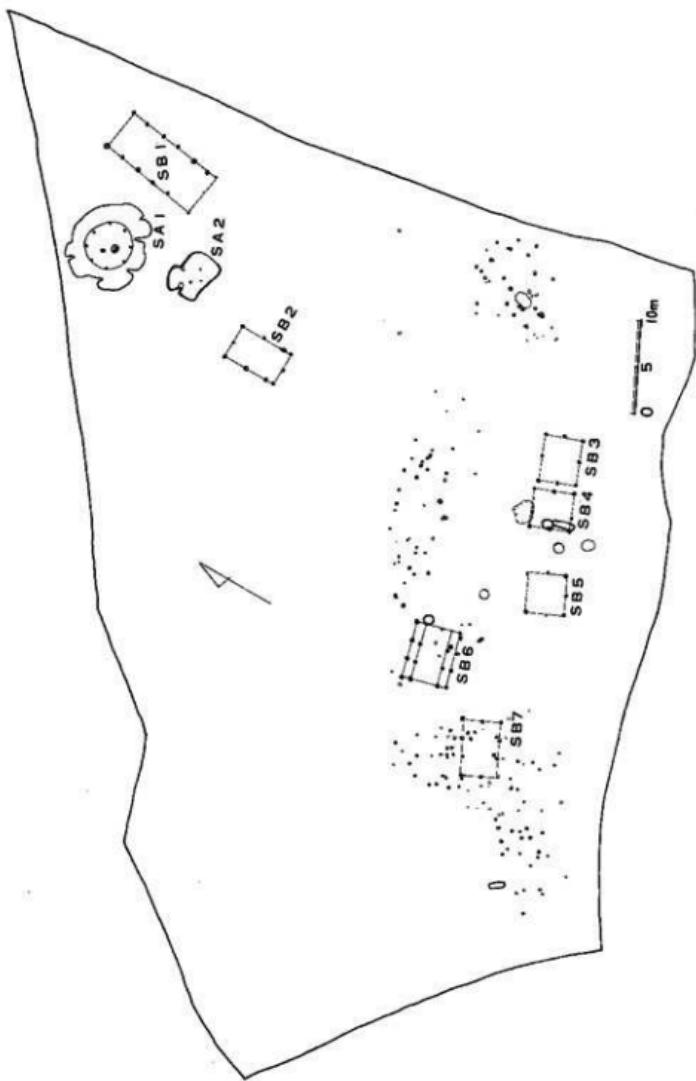
B-2区で合計7棟検出した掘立柱建物は、大きく二群に分けられる。おおよそ南北方向にその主軸をもつ一群(SB1, SB2), おおよそ東西方向にその主軸をもつ一群(SB3, SB4, SB5, SB6, SB7)である。柱穴埋土中に遺物を含む例は少ないが、数ヶ所から青磁、白磁等の輸入陶磁器が出土している。全般に掘立柱建物の検出棟数に比較して、柱穴検出数が少なく、これもある限られた短期間の居住域だった可能性が高い。

### ① 1号堅穴住居址（第11図）

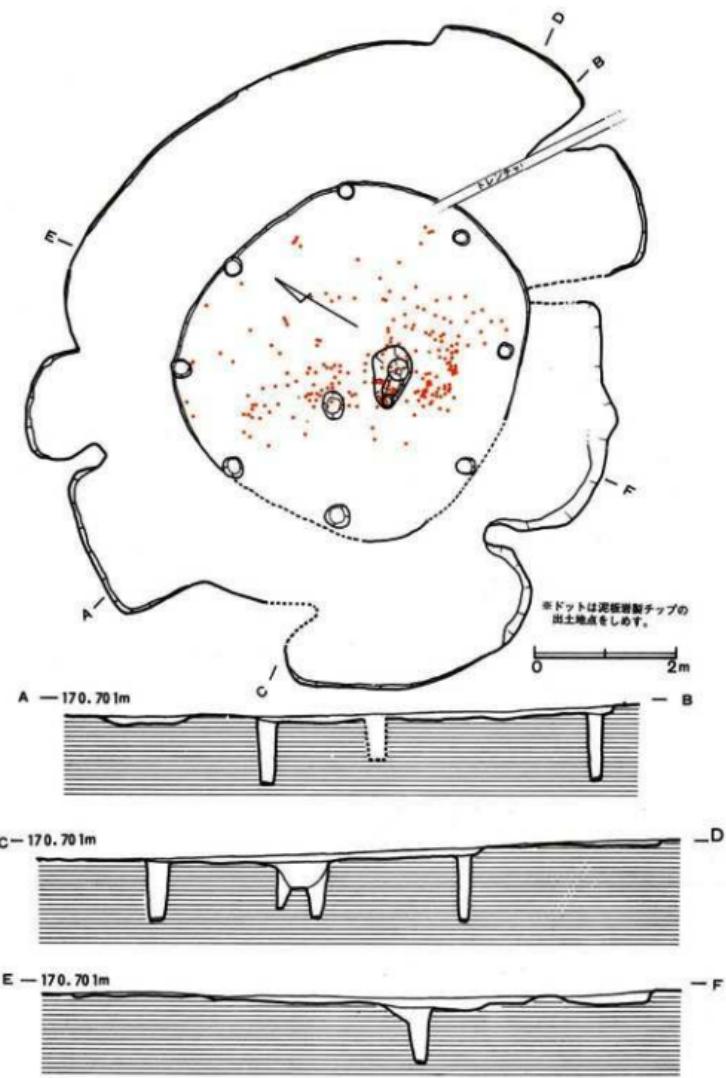
発掘区最北端隅にあり、2号堅穴住居址から北へ約10mのところに位置している。いわゆる花弁状の突出部をもつ堅穴住居址である。この住居址の全体の規模は南北径で8.0m、東西径で9.45mの不正円形となり、同じく不正円を呈する中心部は最大径が5.0m、最小径が4.6mを測る。外縁となる突出部は、すでに大きく削平されており、浅い箇所では検出面からわずかに数cmを残すのみとなり、輪郭さえ不確実な部分がある。内円の床面に対して、外縁突出部床面は高くつくられてその比高は削平されているところで約3.0cm、比較的よく残っているところで約10cmほどある。

内円の円周に沿って8個の柱穴がほぼ等間隔にめぐっている。柱穴は直径22～30cmの円形を呈し、深さは床面から85cm～90cmを測る深くしっかりしたものである。

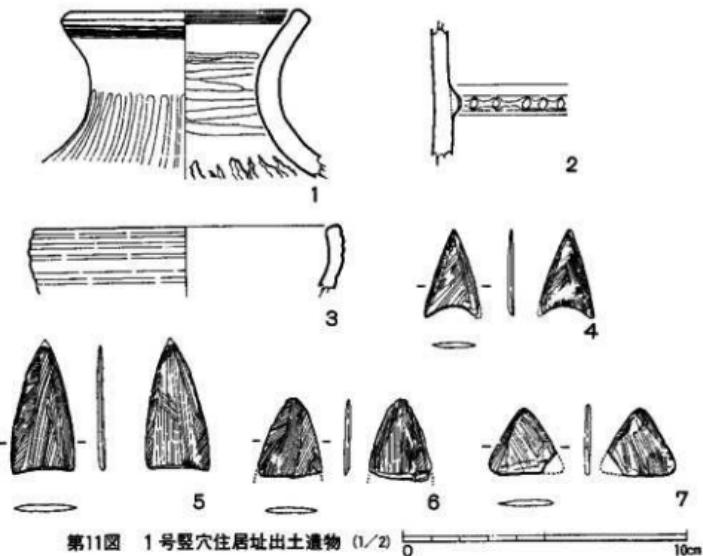
内円の中心部付近には、2個の大きな柱穴がNW-SE方向に並んでいる。ひとつ



第9図 紙屋城址遺跡B-2発掘区遺構記録図 (1/500)



第10図 紙屋城址遺跡B-2区 1号竪穴住居址実測図 (1/80)



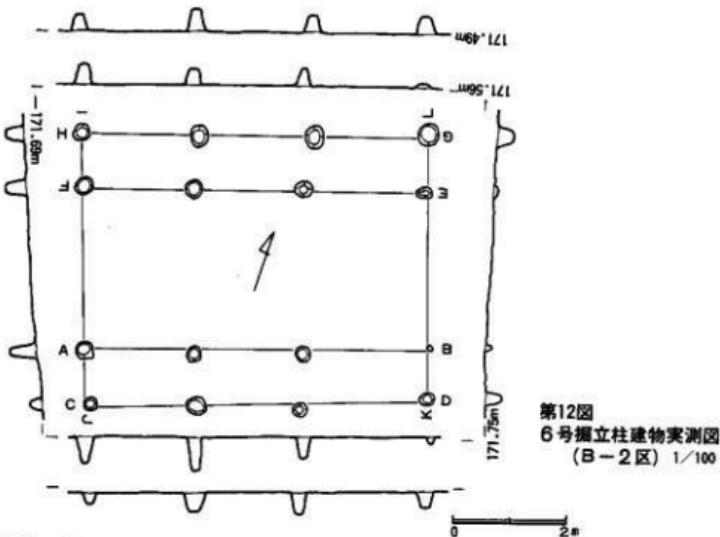
第11図 1号竪穴住居址出土遺物 (1/2) 0 10cm

は長径40cm、短径30cmを測る楕円形のもの、ひとつは長径85cm、短径55cmを測る長円形の掘り込み内に、大小の深い柱穴を有するものである。外縁の突出部は、隅丸の方形を意図しているとおもわれるが、いずれも不定形状で、6つの小はりだし部と、北縁に連続したはりだし部がある。

当住居址は、遺物の項で述べるように石器（磨製石鎌）製作の場として使用されている。

### ① 1号竪穴住居址出土遺物（第12図）

S A 1からは、弥生土器3点、磨製石鎌（破片含）11点、砥石6点、泥板岩剥片248点が出土している。1は壺形土器の口縁部付近で推定口径7.7cmを計測する。口唇部の外面および内面の直下に明瞭なヨコナデ調整痕を残している。外面の調整は頸部以下タテ方向の丁寧なヘラ調整。内部の頸部調整はヨコ方向のヘラ調整である。以下タテ方向の不整なタタキ調整に似た調整痕が観察される。胎土に1.0mm大の長石を多く含んでいる。また3.0mm大の白色石英を少し含む、内外とも橙色を呈し、焼きは比較的堅緻である。



第12図  
6号掘立柱建物実測図  
(B-2区) 1/100

2は變形土器の刻目突帯部で、口縁に近い部分かとおもわれる、風化が著しくひどく磨滅しており、砂粒がボロボロ落ちる。胎土に砂粒、石英、長石、角閃石がほぼ均等に含まれている。

3は凹線文を口縁部に施す土器で、器形は高壺形を呈するとおもわれる。推定口径9.8cmと小形である。胎土に多くの長石を含み、4.0mm大の白色石英を時に含む。焼成、胎土の感じから在地産とはおもわれない。内外とも灰褐色を呈する。

4.5.6.7.は11点出土した磨製石鎌のうち完形、完形に近いもの4点である。すべて暗灰色の泥板岩製である。7.は正三角形状を呈し、基部に抉りがない。

## ② 6号掘立柱建物 (B-2区) (第13図)

東西方向に方向性を有する一群に属する。1間×3間の長方形プランを有する建物を基本に、南北の両翼に3間の廂を有する。廂の柱穴は基本の掘立柱建物を構成するそれと、直徑、深さとも遜色ない。柱穴掘り形は殆ど円形で、径は25~35cm、深さは検出面より7.5cm~60cmで平均35cm位である。柱間寸法は梁行が280cm、桁行が200、220cmを測る。桁行方向はN-18°-Eで、総面積は18.46m<sup>2</sup>廂部をいれて31.46m<sup>2</sup>となる。

B-2区では廂と考えられる付帯施設をもつ掘立柱建物はこの6号が唯一のものである。

## 第3章 紙屋城の歴史概略

紙屋城の創建については、記録がなく明らかではない。野尻町内に所在する野尻城、戸崎城とともに伊東氏の『四十八城』のうちのひとつに数えられている。

永禄年間（1558～1569年）の数年間は伊東氏が木崎原の戦い（元亀3年・1572年）において島津氏に大敗したあと、日向の霸権を失するまで全盛を極めた時期であるが、四十八城はその全盛期を象徴するものとなっている。紙屋城、野尻城、戸崎城の諸城が歴史の表舞台に登場するのは、皮肉なことに先述の伊東氏没落のまさにその時であり、伊東氏から島津氏へと日向の霸権が決定的となるきっかけをつくっている。

『日向記』はその間の経緯について大要次のように記している。伊東三位入道義祐の配下で、野尻城主であった福永丹波の守は、島津氏の策略もあって義祐の不興をかっていたが、天正5年（1577年）12月7日にはついに島津勢をその居城である野尻城に引き入れて、反旗を翻した。時の紙屋城主、米良主税助は福永丹波守と姻戚だったので、これと行動を同じくして伊東義祐に叛している。これらの動きに動揺した戸崎城の兵も遁走してしまい、もろくもこの三城は島津側の領するところとなった。福永丹波守の謀反に対し、本拠地の佐土原から紙屋に向っていた伊東義祐はこれに呼応するように各地で諸将の蜂起するのが伝えられると、やむなく佐土原にとって返したが、ここにも離反するものがあいつぎ、やむなく豊後に落ちのびることとなり、ここに伊東、島津の争霸戦に終止符がうたれることになるのである。この後、島津氏の領することとなった紙屋城であるが、この後の歴史も明確でなく、元和元年（1615年）の一国一城令によって廃城となったといわれている。

## 第4章 まとめ

漆野原圃場整備事業にともなう最後の発掘調査となった62年度事業区内における調査は、60・61年度が旧石器時代から縄文時代早期にかけての遺構・遺物の調査が

主であったのに対して、今回は中世山城郭内に所在する中世の遺構・遺物および弥生時代の遺構を中心とするものになった。これまで、県内で調査された中世城址は清武城、<sup>(1)</sup> 中之城<sup>(2)</sup>、出水山（守永城か）、<sup>(3)</sup> 今江城（仮称）、車坂城があり<sup>(4)</sup><sup>(5)</sup> 本城で6例目となる。中世の典型的な山城として知られる紙屋城の城域は、東西0.8km、南北1.5kmに及び、調査したのはそのうちの第1・2・3郭に所在する一角を対象にしたにすぎず、紙屋城の縄張り全域をカバーするには至っていない。しかし、それでもあわせて14棟の掘立柱建物や土塁・空掘等の遺構、それにともなって出土した輸入陶磁器などの遺物は、文献史料が語らない当時の生活や、史実の裏付け、あるいはそれを補填するものになりうるとおもわれる。

掘立柱建物は、検出された柱穴から極めて効率的に建てることができておらず、建て替えはみられるものの、近辺からの出土遺物の少なさともかね合わせて考えると、恒常的に使用され続けた区画ではなく、“戦”に際して臨戦体制をとるべき生活空間との見方ができる。また、各郭部に占める位置関係とか、その規格性、個々の目的性、それに各郭間における時間的な差異等、検討すべき課題が多い。

紙屋城址に関連する出土遺物では、輸入陶磁器の占める割合が際立っている。その時期はほぼ15世紀中・後半から16世紀頃に限定される。なかでも、白磁・染付の碗皿類では、一、二点の福建、広東系を含むほかは、景德鎮系が多く出土している。青磁碗のなかには、二次的に火を受けて釉が変質しているものがみうけられ、戦火にあった可能性も指摘できるところである。国産の陶器・土師器のうち、土師皿（坏）はヘラ切りはなし底、糸切りはなし底の両種が、主にA-1、A-2区から出土しているが量的には数少ない。紙屋城とほぼ同時期と考えられる清武城、中之城からはヘラ切り底土師皿（坏）は一点も出土しておらず、本城の両種の混在は、本県における糸切り底土師器の出現期からヘラ切り底、糸切り底混在期、そして糸切り底中心の時期を特定するうえでの新たな資料となろう。

住居内に区画をつくり、間仕切り様を呈する弥生時代から古墳時代にかけての異形の住居址は、野尻町内では大荻遺跡<sup>(6)</sup>の2例に次ぐ検出例となった。大荻遺跡のものは方形プランを基調として突出部を設けるものだけであったが、今回は円形プランを基調として、その円周部外縁にそって区画部がめぐる、いわゆる花弁状住居址を方形のそれと合わせて検出することができた。1号竪穴住居では、その住居内より刻目突帯を有する甕（在来）とともに、口縁外面に数条の凹線を施す瀬戸内

系土器（外来）が出土し、その時期は花弁状住居出現期の弥生後期初頭にあてることができる。なお、その西限は、先年（1987年）永田原遺跡（えびの市）において<sup>(8)</sup>検出された古墳時代初頭期のものである。

以上、発掘調査によって明らかとなつた事柄も多いが、それにも増して検討すべき課題が山積したというのが実感である。今後はそれらをひとつひとつ分析検討して本報告に期したい。

- 註 1. 「清武城跡」「九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書(3)」宮崎県教育委員会  
(1979)
2. 「都城中之城」都城市教育委員会 (1983)
3. 国富町に所在、未報告
4. 「今江城跡」「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報(V)」宮崎県教育委員会 (1985)
5. 「中坂城跡」「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報(VI)」宮崎県教育委員会 (1986)
6. 谷口武範「土師器に関する二・三の問題について」・「山内石塔群」宮崎学園都市  
遺跡発掘調査報告書第1集・宮崎県教育委員会 (1984)
7. 「大荻遺跡2」瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告  
宮崎県教育委員会 (1975)
8. 「永田原遺跡」上江・池島地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要  
えびの市教育委員会 (1987)

# 紙屋城址遺跡における土壤調査

宮崎県総合農業試験場化学部

野尻町紙屋城址遺跡における土壤断面調査の結果は下記のとおりである。

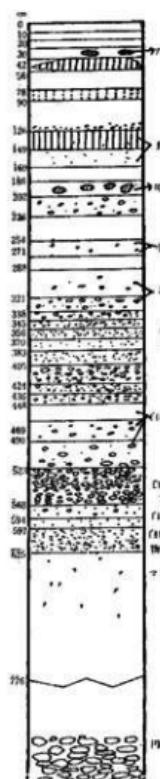
調査年月日：昭和62年10月1日

調査場所：野尻町紙屋

紙屋城跡第3空堀

土壤群：黒ボク土

土壤断面記載：



- I 1 0~10cm、黒褐(7.5 YR 4/2)~(7.5 YR 4/4)色の壤上(L)表層で、腐植にやや富み、発達弱度の細粒状構造を示す。粘着性弱、透水性大で、植物根に富む。極てやわらかい。層界は漸変。
- I 2 10~20cm、黒(7.5 YR 4/2)~褐(7.5 YR 4/4)色の壤土(C L)~壤土(L)。発達弱度の粒状構造、腐植を含み、粘着性小。透水性大で、植物根に富む。ち密度は8mm、層界は漸変。
- I 3 20~30cm、黒褐(7.5 YR 4/2)~暗褐(7.5 YR 4/3)の色の壤土(L)、発達極弱度の塊状構造、腐植を含む。粘着性小、透水性中で、植物根を含む。ち密度は12mm、層界は漸変。
- I 4 30~42cm、黒褐(7.5 YR 4/2)~明褐(7.5 YR 4/4)色の砂壤土(S L)~壤土(L)、発達弱度の塊状構造。アカホヤの小塊を含む。小孔隙あり。腐植を含む。粘着性小、ち密度は15mm、層界は漸変。
- I 5 42~56cm、黒(7.5 YR 4/1)色の埴壤土(C L)で、レンズ状を示す。発達弱度の塊状構造、粘着性中、透水性中で、植物根あり。

- ち密度は18mm、層界はやや明瞭。
- I 6 56~78cm、褐(7.5 YR 5/6)色の壤土(L)、発達弱度の塊状構造、腐植を含む。小孔隙あり。粘着性やや中、透水性中。ち密度は15mm、層界はやや明瞭。  
[これらの各層は、いずれも人為による盛土部であると思われる。]
- II A 78~90cm、黒褐(7.5 YR 3/4)色の微砂質壤土(S i L)で、現在の表層に相当する。発達弱度の塊状構造で、腐植にやや富む。細孔隙あり、粘着性中、透水性中、ち密度は18mm。層界は明瞭。
- II B 90~126cm、明褐(7.5 YR 5/6)色の砂壤土(S L)、アカホヤ層で、発達弱度の塊状構造、ノコクズ状を示し、火山ガラスに富み、軽い。可塑性、粘着性は極めて弱い。下部位(123~126cm)に、明褐(7.5 YR 5/6)色の軽石小粒あり。ち密度は25mm。層界は明瞭。
- III A 126~149cm、黒(10Y R 1.7/4)色の埴壤土(C L)、過去の表層(埋没表層)で、腐植にすこぶる富む。発達弱度~中度の塊状構造、可塑性、粘着性強、透水性中で、孔隙を含む。白色長石粒を含む。ち密度は28mmで、ちみつ。層界はやや漸変。
- III B 21 149~169cm、褐(7.5 YR 5/6)色の埴壤土(C L)、発達中度の塊状構造を示す。腐植にやや富み軽い。可塑性、粘着性強、透水性中、ち密度は26mm。層界はやや漸変。
- III B 22 169~186cm、褐(7.5 YR 5/6)色の埴壤土(C L)、発達中~弱度の塊状構造、腐植を含み、孔隙あり。小レキあり、可塑性、粘着性中、ち密度は23mmで、上層よりやわらかい。層界は漸変。
- IV A B 186~202cm、暗褐(7.5 YR 5/6)~褐(7.5 YR 5/6)色の埴壤土(C L)、梢円状の暗色物質を含む。風化した軽石小粒を含む。多孔質で軽い。可塑性、粘着性中、透水性弱、ち密度は21mm~25mm。層界は漸変。
- V B C 202~226cm、褐(7.5 YR 5/6)色の壤土(L)、発達中度の塊状構造で、腐植を含まず、小(5~6mm)粒の風化軽石やダイダイ(7.5 YR 5/6)色~白色小粒(長石粒)灰色小粒風化レキ〔小林軽石層〕。小孔隙あり。可塑性、粘着性弱、ちみつ。ち密度は29mm。層界は漸変。
- VI B 21 226~254cm、褐(7.5 YR 5/6)色の埴壤土(C L)。発達中度の塊状構造。風化軽石、小レキあり。小孔隙を含む。可塑性、粘着性中、透水性中、ち密度は26mmで、上層よりやわらかい。層界は漸変。
- VI B 22 254~271cm、褐(7.5 YR 5/6)色の埴壤土(C L)、発達中度の塊状構造、孔隙あり、風化軽石なし、小レキをわずかに含む。可塑性、粘着性、透水性中、ち密度は23mmで、上層よりやわらかい。層界はやや漸変。

- VIB 23 271~288cm、明褐色(7.5 YR 5/6)色の埴壤土(CL)、発達中~弱度の塊状構造、小レキを含まず、可塑性、粘着性、透水性中、小孔隙あり、ち密度は20mmで、上層よりやわらかい。層界はやや漸変。
- VIB 21 288~321cm、褐(7.5 YR 5/6)色の微砂質埴壤土(SiCL)、発達強~中度の塊状構造、赤褐色風化小レキを含む。可塑性、粘着性中、透水性小、かたい。ち密度は30mm。層界は漸変。
- VIB 22 321~338cm、褐(10Y R 5/6)色の微砂質壤土(SiL)、赤褐色風化小レキは上層より多い。可塑性、粘着性や中、透水性弱、かたい。ち密度は30mm。層界は漸変。
- VIB 23 338~345cm、明褐色(7.5 YR 5/6)色の微砂質壤土(SiL)、暗赤褐色(5 YR 3/4)風化小レキは上層より富む。上層よりかたい。ち密度は32mm。透水性は小、層界は明瞭。
- VIC 345~356cm、砂レキ層、暗赤褐色(5 YR 5/6)、赤褐色(5 YR 5/6)などの風化~半風化火山性砂レキ(スコリア質)である。層界は明瞭。
- VIC 1 356~370cm、砂層、褐(7.5 YR 5/6)(50%)と赤褐色(5 YR 5/6)色の砂(50%)の混合した砂層。ち密度は31mmである。層界はやや明瞭。
- VIC 2 370~383cm、砂レキ層、褐(7.5 YR 5/6)、暗褐色(5 YR 5/6)色の風化~半風化火山性砂レキ層。ち密度は35mmでかたい。層界はやや明瞭。
- VIC 3 383~405cm、砂層、VIC 1層と類似した砂層で、褐(7.5 YR 5/6)(50%)、暗赤褐色(5 YR 5/6)色(50%)小粒で砂層を示す。ち密度は30mm、層界は明瞭。
- VIC 4 405~424cm、砂レキ層、黒褐(5 YR 3/4)(40%)、暗赤褐色(5 YR 3/4)(30%)、暗褐色(7.5 YR 5/6)(30%)色の未風化、半風化~風化の火山性砂レキより構成されている。層界は明瞭。
- VIC 5 424~436cm、砂レキ層、灰褐(7.5 YR 5/6)~褐(7.5 YR 5/6)色の小粒状、細砂レキよりなり、上層より粒径が小さい。層界は明瞭。
- VIC 6 436~448cm、砂レキ層、黒褐(7.5 YR 3/4)(20%)、褐(7.5 YR 5/6)(60%)赤褐色(5 YR 5/6)(20%)の火山性砂レキよりなり、粒径は上層より大きい。層界は明瞭。〔VIC 1~C 6は同じ火山性砂レキからできており、堆積を繰り返したものとおもわれる。〕
- VIC 1 448~469cm、明褐色(7.5 YR 5/6)色の微砂質埴壤土(SiCL)、にぶい褐(7.5 YR 5/6)、明赤褐色(5 YR 5/6)色の風化軽石、白色風化物質が混在。発達弱度の塊状構造、小孔隙有り、可塑性、粘着性中、透水性小。ち密度は21mm、軽い。層界はやや明瞭。

- IXC 2 469~490cm、明褐色(7.5 YR %)色～にぶい褐色(7.5 YR %)色の混色の微砂質埴壤土(S i C L)、風化白色粒が上層より多く、粒径が大きい。発達弱度の塊状構造、軽い。小孔隙あり、可塑性、粘着性中、透水性小、ち密度は25mm、層界は漸変。
- IXC 3 490~523cm、褐色(7.5 YR %)明褐色(7.5 YR %)、にぶい褐色(7.5 YR %)、白色との混合した微砂質埴壤土(S i C L)、風化した白色粒が多い。発達弱度の塊状構造、小孔隙あり、可塑性、粘着性中、透水性中軽い。ち密度は18mm、層界は明瞭。
- IXC 4 523~568cm、風化軽石を含む砂レキ層、にぶいダイダイ(7.5 YR %)(10%)、ダイダイ(7.5 YR %)(40%)、黒褐色(7.5 YR %)(20%)、灰白(7.5 YR %)～色の風化軽石粒と半風化砂レキ粒よりなる。ち密度は21mm、層界は明瞭。
- X C 1 568~584cm、褐色(7.5 YR %)色の微砂質埴壤土(S i L)、褐色(7.5 YR %)、ダイダイ(7.5 YR %)色、風化軽石小粒を含む。発達弱度の塊状構造、小孔隙あり、可塑性、粘着性弱、透水性中、軽い。ち密度は26mm、層界はやや明瞭。
- X C 2 584~597cm、ダイダイ(7.5 YR %)色の微砂質埴壤土(S i L)、にぶい褐色(7.5 YR %)色の風化軽石小粒(20%)がみられる。小孔隙あり、可塑性、粘着性弱、透水性中、ち密度は19mm、層界は明瞭。
- X C 3 597~625cm、灰白(7.5 YR %)色(70%)とにぶいダイダイ(7.5 YR %)色の混色した埴質砂土(L S)で、白色風化物質を主体としている。可塑性弱、粘着性弱。透水性弱軽い。ち密度は20mm、層界は明瞭。
- X I C 625~776cm、明褐色(7.5 YR %)色の軽埴土(L i C)～重埴土(H C)、発達弱度の塊状構造。褐色マンガン斑あり、小孔隙を含む。可塑性強、粘着性強、透水性弱、湿潤。ち密度は18mm。
- 以上の断面調査結果より、本全断面は、最下部の円レキ層上の11断面によって構成されており、おもにⅠ～Ⅵ断面は風積性堆積物、Ⅶ～X I断面は水積性堆積物によるものと思われる。

### 土壤断面の記載に関する解説

1. 土 壤 群：断面形態の主な特徴および母材、分布する地形などについて共通点をもっている一連の土壤統をまとめて土壤群とする。たとえば本断面は多湿黒ボク土（土壤群）（黒ボク水田をさす）一表層多腐植質多湿黒ボク土（土壤統群）一冲原統（土壤統）(30~60cm以下にアカホヤ層あり、埋没腐植層あり）となる。
2. 土 壤 断 面：断面にみられる土壤層位の配列は層位分化の原因となった土壤生成過程を反映している。

3. 土壤層位の区分：一般に土壤断面は上から順にA層、B層、C層などの3つの主層位から成立している。

- (1) A 層：腐植で暗色に汚染され、有機物が無機物と結びついた腐植が多量に集積している層で、この層の質的特徴と形態的特徴（土色、構造など）によって細分するときはA<sub>11</sub> A<sub>12</sub> のように記す。  
また、補助記号として、p（作土層で、plowingの略）、g（斑紋の存在）を用いて、水田の作土層はA<sub>p</sub>g、また畑の作土層はA<sub>p</sub>で示される。
- (2) B 層：A層とC層の中間に位置し、母材の風化により生成された遊離鉄によつて赤褐色、褐、黄褐色を呈する風化層、あるいはA層から、洗脱された物質の集積層で構造が発達していることが多い。  
B<sub>1</sub> 層はA層とB層の漸移層でB層の性質が優越している層である。形態的特徴（土色、構造、土性など）により、B<sub>2</sub> 層また、B<sub>21</sub>、B<sub>22</sub>などに細分される。
- (3) C 層：風化作用を受けてもろくなっているが母岩の組織を残している。土壤化はほとんど進行せずに無構造、いくつかの層に区分されるときは上から順にC<sub>1</sub>、C<sub>2</sub>……のように細分する。
- (4) 埋没層：現在の土壤下に埋没した土壤については現在の土壤をⅠA、ⅠB、ⅠC、埋没土をⅡA、ⅡB、ⅡC…以下Ⅲ…、Ⅳ…とする。

4. 野外土性の判定：土性は土壤断面の層位間の比較、風化の程度、異種母材の判定などの重要な目安となるので、現場で手ざわりや肉眼的観察によってだいたいの判定（野外土性という）を行う。（表1 参照）

表1 野外土性判定の目安

判 定 法	土性名と略号
ほとんど砂ばかりで、ねばり気を全く感じない。	砂土(S)
砂の感じが強く、ねばり気はわずかしかない。	砂壤土(S L)
ある程度砂を感じ、ねばり気もある。砂と粘土が同じくらいに感じられる。	壤土(L)
砂はあまり感じないが、サラサラした小麦粉のような感触がある。	シルト質壤土 (S i L)
わずかに砂を感じるが、かなりねばる。	壤壤土(C L)
ほとんど砂を感じないで、よくねばる。	重粘土(H C)

5. 土色の判定：土色を調べようとする層位のなかから、代表的な色調の部分から適当な大きさの土塊をとり、標準土色帖を使い、土壤の色と一致する色片をきがす、土壤の色と一致する色片が決ったら色相、明度／彩度の順に並べ黒(7.5Y R 2/1)のように記載する。
6. ち密度：硬度計（山中式硬度計）を用いて平滑に整えた土壤断面に対し、直角の方向に硬度計を押しあて、その円錐部のつばが土壤面に密着するまで、ゆっくり水平に保ちつつ押し込み、その貫入の深さを数値mmで読み、その平均値で示す。
7. 可塑性（表2）：可塑性とは、力を加えていくと変形し、力を除いたときその変形を保持する能力を表わす。野外での判定は、土壤を親指と人差指の間にこねまわし、線状や細い棒状の形にできるかどうかによっている。  
可塑性の強弱の区分は、土壤に充分な湿りを与え、親指と人差指との間でこねて粒団を壊し、こねている間に水分が蒸発し、土が指に付着しないようになったときに棒状にこねのばし、その状態を次の基準によって区分する。

表2 可塑性の区分基準（農林省、1961）

区分	基 準
なし	全然棒状に延ばせないもの。
弱	辛うじて棒状になるが、すぐ切れてしまうもの。
中	直径2mm内外の棒状に延ばさせて、こね直すのに力を要しないもの。
強	直径1mm内外の棒状に延ばせて、こね直すのにやや力を要するもの。
極強	長さ1cm以上の極めて細かい糸状に延ばせて、こね直すのにかなりの力を要するもの。

8. 粘着性：粘着性とは、土壤を親指と人差指の間で圧して引きはなすときの付着する性質をいっている。粘着性が最大になるまで水分を与え、親指と人差指との間の付着性の強弱によって次のように区分する。

表3 粘着性の区分基準 (Soil Survey Staff, 1951)

区 分	基 準
な し	土壤がほとんど指に付着しない。
弱	土壤が一方の指に付着するが、他の指には付着しない。指をはなすとのびない。
中	両指頭に付着する。指をはなすと、多少伸びる傾向をもつ。
強	指頭に強く付着する。指をはなすと伸びてくる。

(有村 玄洋)

図 版

図版 1



秋社川をはさんで第1郭を眺む



主郭部



第4郭(通称 井戸平)  
フクニマ

図版2



第2空堀・土壘  
(杉林が空堀部)



第2空堀断面精査状況



第2空堀土壘断面

図版3



第3空堀現況



第3空堀底（薬研堀）

図版 4



A-2区発掘区（杉林は第2空堀、その手前が第2土塁）



A-2区発掘区遺構検出状況

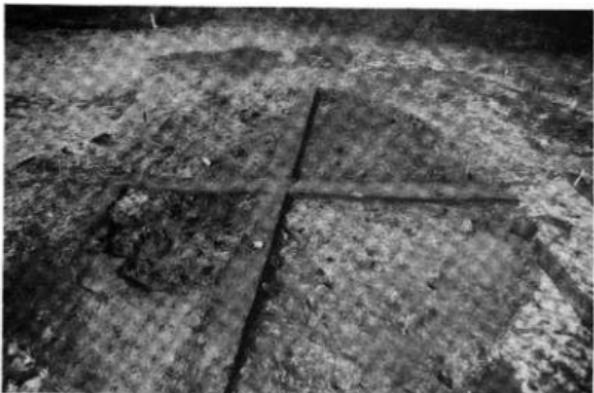


1号竪穴住居跡検出状況

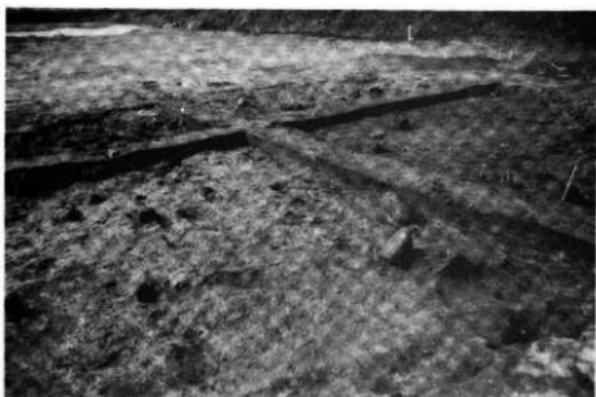


1号竪穴住居 · 2号竪穴住居

図版6



1号竪穴住居跡、遺物出土状況



竹串は泥板岩製片

図版7



B-2区発掘状況



6号柱立建物跡



染付（碗・皿）〔輸入陶磁器〕



青磁・白磁（碗・皿）〔輸入陶磁器〕



弥生土器口縁部  
(1号竪穴住居出土)



弥生土器口縁部  
(2号竪穴住居出土)



擂鉢・壺類(備前)、火鉢(瓦質土器)



土器 (壺)

紙屋城址遺跡発掘調査  
概要報告書

発行年月日 昭和63年3月  
発 行 野尻町教育委員会